

(一) 幼児期に漢字を与える

すでに述べたように、漢字は幼児に喜ばれています。幼児は漢字を楽しんで覚えています。それなのに、どうして小学校や中学校では、漢字が嫌われ、漢字学習がうまくいかないのでしょうか。

これは不思議のようですが、実は当然のことなのです。つまり、与えられたものは、それが善悪難易の区別なく、言葉でも行勤でもこれを身につける能力は幼児期が最高なのですから、幼児なら漢字がどんどん覚えられても、小学生や中学生になると、そのようには覚えられないからです。

ですから、わたしは、幼児の生活環境に出てくる漢字は、幼児期のうちに覚えさせるようにしなければいけないと言うのです。漢字を覚える能力が衰えるようになってから、苦しませて学習させるのは不合理だと言うのです。

しかし、小学生や中学生になってから漢字を教えるにしても、もっと楽しく学習できる方法はあるのです。ただ、文部省がそういう指導法を取り上げていませんし、したがって、先生たちも知りませんし、試みようともしないだけのことです。

昭和46年の4月から、小学校の教科書が変わって、今まで6年間に学習していた881字の漢字が115字ふえて、996字になります。

ところが、これが決められたのは、昭和42年8月でした。その時、当時の朝日新聞に、“漢字学習に一言”という、ある小学校長の意見

が掲載されました。それは、「教育課程改定に関する中間報告によれば、小学校で扱う漢字を千字以上に増加すると言う。今まで881字の漢字が覚えきれずに悩んでいるのに、この上ふやすとは何事か。この上教師と児童を苦しめるのはやめてもらいたい」という意味のものでした。

これは、上の校長だけの意見ではなく、大方がこういう意見でした。わたしはこのとき、日本教育新聞から依頼されたのを機会に「漢字は早く多く学ばせよ」という標題で寄稿しました。その中で、こう意見を述べました。

考えていただきたい。子どもたらが社会に巣立った時、生活上必要な漢字は、当用漢字と呼ばれるものだけでも1850字あるのである。その他、必要な地名・人名漢字を加えれば、優に2000字は越えよう。つまり、この2000の漢字を知らないと毎日の新聞記事は読むことができず、社会人として十分な生活を営むことは不可能であろう。

とすれば、漢字の学習は、それがどんなにむずかしいものであろうと、社会生活に必要なだけの漢字を学習させ身につけさせてやることに努力するのが、教育に携わる者の当然の義務であろう。

そういう見地に立てば、小学校で教える漢字を千字にふやしても、まだ十分とは言えないのである。生活に必要な能力を養うためには、児童も教師も苦しむのが当然のことであって、この上苦しめてくれるなどと弱音を吐くことは許されない。